

Poetic City, Long Coat そして Warshawski



福島県立医科大学 地域包括的癌診療研究講座・消化管外科学講座 教授
会津中央病院 がん治療センター 所長

柴田 昌彦

米国イリノイ州の都市シカゴのことである。小説家で精神科医のなだいなだ氏がニューヨークに赴く際、シカゴで数日を過ごした時にシカゴを Poetic city と評したと何かで読んだ記憶がある。もとはインディアンが、そしてギャングスターがかつて闊歩した町、現在は商業、金融、政治、物流の一大中心地である。何となくその歴史から Poetic というのもわかる気がする。私が初めてこの地を訪れたのは 1986 年 12 月だったように思う。当時カリフォルニア州の大学でやっとのことで有給のポジションを獲得し間もない頃だった。学会に発表すれば交通費は大学が支払ってくれたので薄給でも航空機で出張することができた。American College of Surgeons の学術集会 Surgical Forum が毎年シカゴで開催されていたと記憶する。また ASCO (米国臨床腫瘍学会) が 1964 年に AACR (米国癌学会) と分かれて創設され、この頃から二つの学会は 1994 年まで同じ会場で引き続き開催されていた。これらの学会で発表するためにこの町を訪れ、最近では ASCO が数年間シカゴで固定して開催されることになり、この町を度々訪れることになった。外科学ではシカゴは重要な都市で、International College of Surgeons の米国チャプターを創設したシカゴ大学の Max Thorek 博士がシカゴ中心部 (Loop) の北方、Gold Coast というエリアに International Museum of Surgical Sciences を開設し、現在まで国際外科学会が運営している。ミシガン湖を望むベルサイユ宮殿の一部を模したとされる壮麗な建物では、外科学の歴史や手術器具などをわかりやすく展示している。建物に比べてその展示は少し物足りないと感じた記憶

があるが、建物はその内部を含めて一見の価値があるので興味のある方は訪れてみてはいかがだろうか。

シカゴは映画の舞台となることが多かった。Loop より南方のグラントパークの正面に位置するヒルトンシカゴは非常に古いホテルである。その豪華さは息をのむほどで、かつては中西部のホワイトハウスと称されるほどの有数のきらびやかなホテルであったらしい。現在のコンベンションホール (McCormic Place) が拡張・整備されて大きな学会が行われるようになるまでは ASCO や AACR の会場・学会本部として使われていた。またこのホテルはハリソンフォード演ずる『逃亡者』やマコーレ・カルキンの『ホームアローン 2』の舞台として登場する。最近新しい大きなホテルが続々と Loop 周辺に出現し、このホテルは古くかび臭い、かつてのシカゴ隆盛の歴史の一部となってしまった。ヒルトン系列の新しい快適なホテルが市内に続々と建てられてその順位も下がったのか、昔では考えられないほど宿泊費が安値となった時期があり私も泊まることができた。天井が高く大きな部屋は寒く乾燥して居心地は決して良くなかった。しかしそれでもその美しさは歴史によって重厚さが増し、今ではひっそりとたたずむ老婦人の様に感じられる。各階の古いエレベーターの脇に設置された、郵便を地下で回収するための郵便ポストは現在では見られない珍しいものであるし、かつて AACR の開催前日、Cash Bar (自分でその都度お金を支払うバー) 付きのレセプションが行われていたバンケットホールは、天井に見事な金色の装飾がなされていたように記憶している。残念ながらこのようなパーティー

も開かれなくなってしまった。このホテルからしばらく西に進み水路を渡ってたどり着くのがアムトラックが発着する Union Station である。この古い建物の階段でケヴィン・コスナー演ずる『アンタタッチャブル』ではアルカポネの会計士が確保されるのが撮影された。カート・ラッセルやロバート・デニーロが出演した『バックドラフト』も舞台がシカゴで、撮影には市内の多くの場所が使われた。Loop から南方 4 km ほどのところにチャイナタウンがあり、その入り口に位置する Engine 8 Truck 4 と呼ばれる消防署が撮影に使われた (写真 1)。わかりやすいので食事に出かけた時にでも消防署の車庫の赤いドアと煉瓦でできたかわいらしい建物を見てくるのも楽しいものである。

シカゴの真冬をご存じだろうか。1980 年代は Surgical Forum は毎年 12 月後半に開催されていたように思う。Windy City と呼ばれるシカゴでは、ミシガン湖を渡る風はとて強く凍りつくほど冷たい。その強さゆえに「Chicago Window」と呼ばれるようになった高層建築の窓の様式が特徴的である。真冬にはマイナス 20℃ にも下がる温度が、強風のおかげで体感温度はさらに低くなる。最近では男性用のコートはヒップが隠れるくらいの短いコートが主に売られているようだが、シカゴの冬を経験するとコートは長くあるべき、そしてコートの襟は風が強い時に立てるためにあると実感させられる。実際に電車やバスに乗り降りする人々を観察すると、今でも皆暖かい長いコートを愛用しているようで、時代遅れのファッションセン



写真 1 Engine 8 Truck 4

スを有する私は何となくうれしくなる。暖かいコートを着て湖岸まで行ってみると、時には凍ったミシガン湖を見ることができる。北海道で沖から流れてくる流水をご覧になった方も多いと思うが、ミシガン湖では岸から凍りだして沖に広がる。湖岸近くでは風で打ち寄せられた水が折れて鋸状に盛り上がり、竜の群れが押し寄せているような感じである。また水路を遡って氷が広がり、チューイングガム会社の本社として作られた Wrigley Building あたりの水路は氷で覆われることもある。シカゴヒルトンの正面のグラント公園の噴水も凍りつき、氷柱のモニュメントになるのを目にした。

シカゴを舞台にした探偵小説をご存じだろうか。女性作家サラ・パレッスキーによる Warshawski シリーズである。主人公の V.I. Warshawski (呼び名はヴィク) はワルシャワの名前がラストネームにあるようにポーランド系移民の父とイタリアからの移民の母の間に生まれた女性である。オペラ歌手であった母は第 2 次世界大戦のナチスによる迫害を逃れて渡米したユダヤ人で、シリーズの中でこの背景は度々色濃く語られている。ヴィクはシカゴのサウスと呼ばれる当時はブルーカラーの労働者が住むエリアで育ち、奨学金を得て名門シカゴ大学のロースクールを卒業して弁護士としての仕事を始める。しかし貧困者への弁護士活動を通じて法律行政の矛盾に直面し、弁護士をやめて私立探偵として生計を立てるようになった設定である。シカゴ大学出身の弁護士資格を有するという利点を生かしながら勇猛果敢に探偵業務をこなしていく。自分のことをヴィッキー (女性の呼び名) でなくヴィク (男性的な呼び名) と周囲の人たちに呼ばせて傷だらけの勇ましい生活を送るが、毎日愛犬とともにミシガン湖畔を 4 マイル走るといふ健康志向を持ち (写真 2)、服装や髪型などへの女性としての関心や感情も示されている。1982 年から 20 作以上出版されているが、その翻訳は一貫して山本やよい氏が担当している。角川出版も女性の視点での翻訳を大切にしているのではなかろうか。作中にはシカゴの地名が次々出てくる。読み進めるうちに知った場所の名前やストリートの名前が出てくると、その光景が目に見えて浮かんでくる思わず物事に引き込まれ、私は Page Turner となってしまう。



写真2 湖畔のジョギングルート

ヴェイクの通っていた（と設定）シカゴ大学は言わずと知れた高い学費が有名な名門私立大学で、Chicagoanの誇りである。輩出したノーベル賞受賞者は核物理学など100名と世界で最も多く、東京大学の小柴昌俊先生も受賞に関連する仕事はシカゴ大学でも行われたそうである（写真3：核分裂の連鎖反応や世界初の原子炉を成功させことで受賞したエンリコ・フェルミ博士を記念して建てられたヘンリー・ムーアの彫像。1988年にシカゴ大学病院の友人を訪れた際の写真）。しかしこれらの業績は広島と長崎に落とされた原爆のもととなった「マンハッタン計画」の一部であり、日本人としては少々複雑な気持ちにさせられる。石油王であったロックフェラーによりこの大学は創設され、Loopから南方に鉄道で10分程度の距離のハイドパーク市区に広いキャンパスが広がる。その南側は



写真3 Enrico Fermi

1893年に行われたシカゴ万博の会場だった土地だそうである。大学病院もそのキャンパス内にあり、キャンパス自体はオックスフォード大学を模して造成・建築したとのことで、開放的な雰囲気のアメリカの大学と少し趣が異なるような気がする。この、世界でも有数の巨大なユダヤ系財団（ロックフェラー）はフルブライト奨学制度など日本の医学・科学の進歩にも大きく貢献してきており、わが福島県が誇る野口英世先生もその研究支援を受けたといわれている。

今年のASCO年次総会も6月2日からシカゴで開催される。新型コロナウイルスの感染状況も米国では落ち着いた状況で日本からも出席を検討されている先生方も多いのではなかろうか？ Warshawskiシリーズを何冊か読んでから出かけるのも楽しいと思いますよ。